

# 千刈狸の呟き

一年に数回、仲間とマジカルミステリーツアーにでかける。行先も目的もわからない旅だ。今年の初夏に決行した時の話である。ツアーコンダクターは、東西南北どちらにしようか…海の傍に集合してるんだから西はないね…などと言いながら一路南へ向かって走り出した。あちらこちらでサブライズ体験をしながら強行スケジュールをこなして、折り返し地点になったのが山形県最上町だった。山形県をぐるりと回った日帰りツアー、芭蕉の出羽路「封人の家」で蚤虱と馬のことなど語りあってから、すぐ近くのその場所に着いた。

「分水嶺（ぶんすいれい）」。山岳地帯では山の稜線のどちら側に降るかによって雨水が流れ込む川と注ぐ海が決まるが、一見平坦なところにも分水嶺はある。全国にも沢山の分水嶺はあるらしいが、奥羽山脈でも低い海拔338mの山が見える最上町の分水嶺地点（一見水のT字路）には山の方から春の小川のような細い水路が静かに流れ込んでいる。あたりは整備された畑や背の低い草花である。T字路に入るか入らないかの所が運命の分岐点で、二手に分かれることになる。東にいく少し太さを増した流れは北上川に合流して太平洋に注いでいく。西に向かった流れは最上川に合流して日本海に注いでいく。分水嶺の水の流れ方に目が釘付けになった。小さい波紋や渦や水しぶきもだんだんはっきりと見えてくる。ああ、日本海へ向かったんだなあとか、本当は一緒に太平洋に行くつもりだったんじゃないかな、「泣き別れ」という言葉が自然と浮かんだ。後日調べてみたら広島県安芸高田市の水田の中にある分水嶺は、地元の人「泣き別れ」と呼んでいるそうで、やっぱりそういうことか…と妙に納得した。しばらく佇んでいたら夫婦連れが来て感慨深げに見つめていて、「笹船でも流してみたらどうかしら、流れにまかせるしかできないけれどね」のような事を聞き慣れない方言で会話していたので、どちらから？と尋ねたら、岩手県からの事。北上川の源流の一つがこういう場所にこんな風にあるのだと

## ～分水嶺～

### 月影の狸

初めて知ったと言って、ではまた、と立ち去っていった。帰路につくことになり私達は最上川を下るかのようになり、さっきの分水嶺の水達と一緒に西に向かった。夕日に染まった日本海が遠くに見えるところまで来た時、帰ってきたんだ！という不思議な感動が湧いてきて、今回もツアーコンダクターにしてやられたと気づき感謝もした。

「分水嶺」を持ちネタとして様々な人達に語ってみたい。どうも演歌のようになりがちだった。二つに分かれた水達はやがて津軽海峡を超えて大海原で再会を果たすのだ…というふうになると、さっそく行ってみたいという反応の人には、ただしツアーのワンポイントとしてのそこですから、そこだけ狙っていてもいいかどうかは保障できないと言っておく。また、ダイナミックな発想の人が沢山いるもので、分かれるとか再会とか言うけれど誰と誰のことですか？所詮、水は蒸発してまた雨になって降ればどうってことないじゃないですか。川の途中で誰かに利用されて瀬戸内海のように行ってるかもしれないし農業用水になって自分達が食べてるかもしれない、水は循環しているのですから、と。確かにそのとおりであるが、そのへんが人間の心の分水嶺というのかもしれない。

今の日本、世界はまさに日々、一瞬が分水嶺だと考えてみるとどうだろう。最上町の分水嶺の水は単純に水は高いところから低いところに流れるものであるという法則だけでなく流こむ時の勢いとか底にある石の配置や大きさや表面の質感でも大きく影響されていく。風にも湿度にも、また何も知らないくせに妙に感動していく私達のような観光客にも影響されていく。

複雑な関係性の中で大きく変化している今の世の中で選択しながら選択されていく激しい日々、「分水嶺」の傍で一息つきませんか？